

# 特集 「近藤原理先生お手伝い」その②

▶ 椎茸菌打ち終了。原理先生を囲んで記念撮影。奥日陰下に原木。H28・3・2

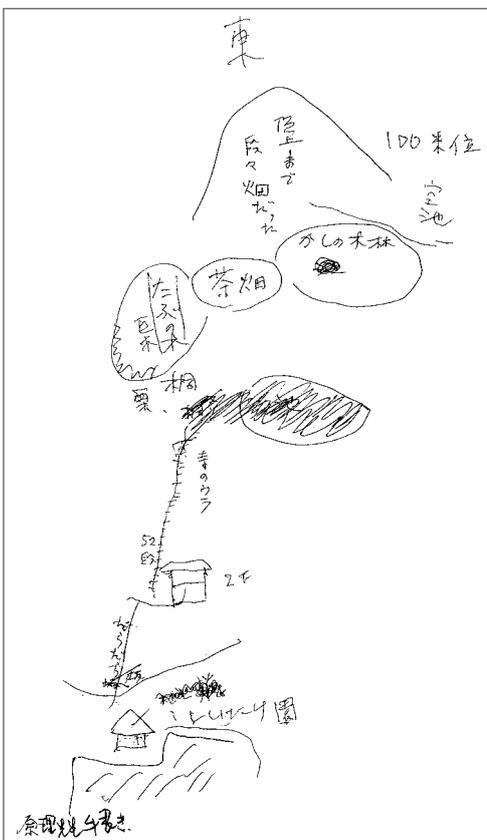


昭和50何年か？筆者は初めて「なずな合宿研修」に参加の機会を持った。8月8日。この日、参加者は午前中に「なずな寮」参集。寮周辺を豚小屋、山羊小屋、

段々田圃、段々畑が取り囲む。まず、生の「なずな」を体験。暑い日差しの中、お茶畑の土手の草刈りを僅かな時間だが手伝った。と、原理先生が近くにおいて、私が鎌を使うのを見て「ほー、鎌使いが上手かですなー」と誉めてくれた。原理先生との出会い。嬉しかった。

午後は国見山荘に移動。前座は日本短波放送の大野智也さん。そして、主催者、原理先生講演は2時間半の長丁場。「優しい言葉で深い思想」で話は解りやすく、頭がしびれるほど刺激的。以後、筆者の「なずな」通いのきっかけとなった。当時、原理先生は45才、筆者は30才か……。

1962（昭和37）年11月、原理先生・奥さんの美佐子さん・二人の息子さん、寮生7人は共同生活の第一歩を踏み出した。原理先生の著作「なずなの日々」にはその日々を写真した写真が多数掲載されている。日本は高度経済成長前で田舎道は舗



▲原理先生手書き裏山絵地図。椎茸の原木になるクヌギの在り場所。（※40年前のなずなの日々時代には畑でありお茶畑であった場所だ）

装道路でない土の道。雨が降れば泥の道。そのぬかるむ道をリヤカーを牽く「なずな」の仲間。寮の下は棚田。耕耘機前の時代だ。鋤と鍬を高く振り上げて田を打つ。昭和41年の記録には「今夏退治したマムシは12匹」とある。「羊を飼いブタを飼う」。椎茸栽培「西瓜出来よく収穫120個」とある。

今回のお手伝いは1月に原理先生の裏山から確保した椎茸原木120本への菌打ち。北総から4人、千葉・

（武井）

ピア宮敷から3人、島原深江・コスモス会から2人。総勢9人の加勢を得て「一日仕事で」何とか菌打ちは終了。今年の秋の椎茸発生が待たれる。

原理先生のお住まいの奥に小さな納屋。スコップが必要になって納屋の戸を開けた。と、そこには「なずな寮」開園当時の物と思われる「鍬」「鋤」「木の根子掘り道具」等が大切に保存されていた。これがもの言わぬ「なずな」の証人。思わず目を見張った。その一つの鍬を手に持ってみた。「なずな」の皆様の汗と血豆で黒光りしたその鍬であった。

3月2日午後4時、原理先生に見送られて後ろ髪ひかれて私たちは「なずな寮」を後にした。第3回原理先生お手伝いはこの秋か……。



発行日 2016. 5. 20  
第 234 号  
(第 1 回発行)  
1974年4月1日  
発行所 北総育成園  
千葉県香取郡東庄町  
笹川い5852  
☎ 0478-86-3003  
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが新しくなりました！  
施設の概要や理念、利用者の様子、園長からのお知らせ等、盛りたくさん！ぜひアクセスしてみてください。  
ホームページアドレス  
<http://www.hokuso-ikuseien.org/>  
Eメールアドレス  
[hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp](mailto:hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp)

## 長崎・近藤原理先生研修訪問記

支援主任 高木 恭一

雪の長崎への訪問から一か月ちょつとが経った3月2日。この日の朝9時、佐々町の近藤原理先生宅に9人の応援部隊が集まった。前回クヌギを伐採して作った原木120本に植菌する作業を行うために集まったメンバーである。今回は園長・補佐・高木の3人で伐採作業を行ったが、かなりの重労働だった。今回は「原木の運搬」「植菌作業(ドリルと植菌)」「原木の本伏せ」の作業を行うため林産班チーフの菅谷主任も加わったが、さらに夷隅市のピア宮敷から多田理事長・内野施設長・吉野さんが長崎と福岡出身という縁で応援に来てくれた。そしてコスモス会から近藤さん・相川さんも来てくれ、9人という十分な人員で作業にあたる事が出来た。そのため作業は順調に進み、空いた時間で長崎県の景勝地を訪れることも出来、充実した3日間となった。

原理先生に挨拶した後、さっそく作業に取り掛かった。1本20kgはありそうな原木を椎茸園予定地へ運び、分担して作業に取り掛かった。コスモス会の2人がドリル、ピア宮敷の3人が植菌を行い、全体の流れを菅谷主任が

指示して作業は進んだ。城之内補佐と高木は山から木を集め、原木を立て掛ける場所を作った。そして園長は庭の手入れを行い、昼食をはさんで2時半には全ての原木への植菌も完了し、120本の原木を並べ終えることが出来た。

原理先生は自宅内の移動も大変な体にも関わらず、昼食は是非ご馳走したいと、近くのレストランに連れて行って下さった。上野さんも付き添い、ステキをご馳走になった。そして午後9時の作業も終え、椎茸園が完成した後、現場まで見に来られた原理先生の感激した様子には、作業をやり遂げた私達にも感極まるものがあった。

千葉から遠い長崎まで二度にわたってやってきて、山のクヌギの木を伐り、椎茸の原木にするという、およそ福祉



▲原理先生お手伝いの9人の仲間はお手伝いが嬉しくて仕方なかった。H28.3.2

の仕事とは関係ないことに必死になった今回の取り組み。損得でもなく、義務でもなく、原理先生の願いをそのまま受け止めた武井園長の思いが結実した取り組みだった。私自身にとっても原理先生は師匠でもあるし、また、武井園長の原理先生の思いに対しての真つ直ぐな姿勢を見て、それを全力で支えるのが私の役割だと素直に思った。仕事の上下関係は別にして「人生意気に感じる」ような場面だった。参加した他の方々も同じような思いだったと思う。だから並んだ120本の原木を見ての満足感・充実感はこの上なものだった。そして喜んでくれた原理先生を見て、「本当にやって良かった」と思った。

今回、原理先生のお手伝いに参加してくださったピア宮敷の内野施設長、コスモス会の近藤さん、相川さんより、感想を寄せて頂きましたのでご紹介します。

## 「近藤原理先生お手伝い」に寄せて

ピア宮敷施設長 内野 浩二

長崎に記録的な大雪を降らせた寒波も一段落し、穏やかな天候に恵まれ、楽しく、また、色々な「縁」を感じる貴重な体験でした。

実はわたくし、長崎市平和町の生まれで、浦上天主堂や平和公園がまさに幼少の頃の遊び場。広報紙「北総の里」に度々長崎の関連記事が掲載される度に、懐かしく、また、郷里のことが気になったり。そして、福祉協会の会合等で武井園長に顔を合わせる度に、「いつか一緒に遊ばせてください」とお願いしていたところでした。そしてこの度、念願が叶い、武井園長より「縁をいただき、近藤原理先生お手伝いプロジェクト」に当法人多田理事長、きくらげ担当 吉野支援員と私の3名で参加させて頂いたことが出来ました。

まず、歓迎の式典における感謝の再会。武井園長の周りにできる利用者の輪は素晴らしい笑顔がいっぱいでした。(広報紙で見かけたあの光景)。そして、幹部職員さんが勢揃いしての意見交換会。利峰理事長の引き込まれる講話では、我々障害福祉に関わる者が本来やらなければならない事、経営者としての視点・気構えを学ばせていただきましたが、雲仙普賢岳の威容とも相まって、そのスケールの大きさは、障害福祉に留まらず(ついに国境をも超えたようです)、地域福祉・地域経済・地域社会そのものを支えるもので

した。ご子息の利一郎氏からはエネルギー感を感じましたが、一方では非常に謙虚で、「色々なご縁をいただいて事業をさせていただいている。縁あつてのものです……。」とおっしゃられていたことが非常に印象的でした。そして、園内・建物内外の細やかな配慮、日陰に咲く花へのこだわりなど、積み重ねたものの重みを感じました。

日が暮れて一路佐世保へ。佐世保は私が学生時代を過ごした街で、およそ四半世紀ぶりの訪れです。夜はおいしくお酒をいただきました。

2日目、私が当時下宿していた町の隣町に近藤原理先生のお宅がありました。先生には、昭和30年代の全盛期に軍艦島に渡って障害児の診断に行かれた話から、最近の様子まで、その話題は多岐に亘り、生涯現役の気概と熱意を感じました。そして、なるほど原理先生の思いが共感呼び、関係が深く広く広がっていくことが想像出来ました。

この先、椎茸園がどのように生かされていくのか楽しみでたまりません。先生には末永くお元気で活躍いただきたいと思います。

2日間の日程を終え、その夜は慰労会を催しました。当時の記憶を辿り、お店は私が通っ

ていた食事処に行きました。そのお店が未だ存在していたことにまずは驚きました(オーナーは代わっていましたが、そこでもなんとも極めつけの縁が。最初は、「お客さんどちらから?」「千葉から来ましたよ……」「はるか昔来たことがあつたのですよ……」など、他愛のない会話でしたが、「近藤原理先生と言われる方のご縁で来ました」と話になった時、何と女将さんが「あら、私は原理先生の息子さんと同級生ですよ」。これには、若干お疲れ気味であった武井園長も生氣を取り戻し、酒杯を重ねていきました。

振り返ると、改めて「チーム北総」のプロフェッショナルさには脱帽しました。準備・段取りが完璧でした。椎



▲束の間の再会。コスモス会の皆さんが手作りのプラカードを持って歓迎してくださいました。温かい姉妹の絆に感謝。H28.3.1

茸の植菌だけに留まらず、植栽の手入れも行い(城ノ内さんはもう少し手を入れたかった様ですが)、「働く……」ことを実践し障害者と共に歩んできた男たちの生き様を見たようでした。

年月をかけてしっかりとした関係を築き、色々と恩を着る。そして、縁を結び次代に繋げていくという武井園長の姿勢こそが北総の宝であり、千葉の財産であることを再認識いたしました。またとない貴重な経験をさせて頂き、有り難うございました。

「近藤原理先生お手伝い」に寄せて

コスモス会ノベル 次長 近藤 哲生

陽春の候となりましたが、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。さて、3月の近藤原理先生お手伝いでは、大変お世話になりました。

私自身、障がい児者福祉と教育に甚大なる貢献をされてきた先生と同じ名字ということもあり、大変光栄に思うとともに、初めてお会いすることができ、本当に嬉しい限りです。

近藤先生は、まだ社会の偏見も強く制度も確立されていない時代から、自宅を今でいうグループホームに開放し、家族ぐるみで知的な発達に遅れを持つ方々と暮らしを共にしてこられた



▲原木にドリルで穴を開けるコスモス会の近藤さんと相川さん。今回の原理先生のお手伝いで共に汗を流し、また一つ姉妹の絆が深まった。H28.3.2

とのことで、当法人の理念に通ずるものを感じ、強く感銘を受けた次第です。今回は、椎茸の菌打ち作業のお手伝いということで、椎茸の菌打ち自体私には初めての体験でしたので、初めはお手伝いになるのだろうか、という不安もありましたが、北総育成園の皆様をはじめ、お手伝いに参加された方々と一緒に汗を流し作業をさせていただくうちに、その不安はすぐに解消されました。

作業をしながら、昨年北総育成園の見学をさせていただいた際に、林産班の皆さんが重たい原木を一生懸命運ばれていたのを思い出していました。

また、お昼は近所のレストランにて参加者全員に先生がご馳走してください、食事を一緒にさせていだき、「な

「ずな寮」の皆さんはこんな風に先生と共に汗を流し、共に食事をして一緒に生活されてきたのだろうと思ひ、感慨深いものがありました。

当日は作業がはかどり、自宅のお庭のお手入れまでさせていたいただくことができ、先生の喜ばれている姿を見て本当に良かったと思ひました。

今回はお手伝いに参加させていただき、本当にありがとうございました。

また収穫の時期には、ぜひお声掛けください。

近年、障がい者福祉を取り巻く環境はますます厳しくなっており、2年後にはまた大きな制度改正も控えていますが、原点は近藤先生が実践してこられた「共生」に尽きると思ひますので、これからも信念を持って取り組んでいきたいと思ひます。

「近藤原理先生お手伝い」に寄せて

コスモス会 メンブレインポーター  
管理者 相川 源海

今回北総育成園 武井園長先生にお声をおかけして頂き、近藤原理先生のお手伝いに参加いたしました。

近藤原理先生のお名前をお聞きした時、ふと30年前の事が脳裏に浮かびました。私が福祉に携わりまだ3年目だった頃、先生の講演をお聞きしたこ

とがあります。

当時先生は大学の教授の傍ら、奥様と2人で障害者と共に働き、共に汗をかき、共に生活をされていました。

ノーマライゼーションの原点である、地域の中で健常者・障害者が共に共存し合うということを実践されたことに感銘を受けたことを今でも忘れずにいます。

近藤原理先生、北総育成園 武井園長先生、コスモス会 本田理事長の3名は、若い時から福祉に対する想いがとても熱い方々です。

日本の福祉はこれまでも過去の歴史を踏まえ様々な制度が確立されてきましたが、最近のテレビ新聞等で未成年の集団暴行、殺人事件が報道される度に心が痛みます。

私も4年後は還暦を迎える身であります。さらに東京オリンピックが開催される年でもありますので、今後利用者さんに対して、「おもてなし」の気持ちで精一杯支援をしていきたいと思ひています。

最後に北総育成園 武井園長先生、職員の皆様、近藤先生と会える機会を頂きましてありがとうございます。

そして近藤原理先生、これからもお元気で、末永くお幸せにお過ごしください。

「釈迦堂」は  
素晴らしい借景の中にあつた

長崎コスモス会と姉妹結縁したのは1992年のこと。この姉妹のご縁は今から25年前、コスモス会理事 長・本田利峰さんと、私が厚労省アメリカ・カナダ研修で一緒であったことに因る。今年でもう24年目となる。いざとなると遠隔地で行ったり来たりは思うようでないが、一年に一度は相互に職員利用者が訪問。一夜を共に交歓し、絆を深めご縁は大切に継続されている。

3月1日(火)、私自身は1年半ぶりに長崎深江の姉妹を訪ねた。今回は同じ長崎佐々町の近藤原理先生お手伝い②の前日。昨年の夏に北総の職員・利用者5名(引率責任は白樫副園長)がお世話になった。その際、「釈迦堂」のことを新しい話として聞いた。利峰さんは一単なる福祉経営者ではない。並はずれた人間哲学・自然哲学者。利用価値が見つからず、邪魔者扱いの「孟宗竹」をふんだんに使った家造りを物にしている。釈迦堂はコスモス会支援職員の手作り。宮大工さんを職員として採用。左官屋さん、元瓦職人であった人、それらの人が支援員として働き、そ

の一つとして、自分達で「お堂」を作ってしまった。

柱となる杉の木も自分の山から選んだ物を使う。全部手作り。納骨堂も兼ねている。見せてもらって、中に入らせてもらって、何だか私もお世話になりたくなった。眼科遙か有明海、背後は噴火の終息した普賢岳。釈迦堂は素晴らしい借景の中に鎮座する。(武井)



▲釈迦堂内、ご本尊様を拜む。筆者とコスモス会本田利峰理事長。



▲背は普賢岳、眼下に有明海。素晴らしい借景の中に手づくり釈迦堂は建つ。

日頃よりお世話になっております千葉明德短期大学の加藤次郎先生より林産班のどくだみ茶にまつわるご寄稿を頂戴しましたのでご紹介します。

### 茶飲み話



千葉明德短期大学 加藤 次郎

かつてこの国には「水筒」という道具があった。出かけるときには水筒にお茶を入れて持ち運んだ。いまではコンビニ全盛時代である。お昼の時間になると、最寄りのコンビニにお弁当とペットボトルの飲み物を買うのに行くのが、ふつうの暮らしになった。

過去の遺物の僕は、お昼ごはんを買って済ますことへ、どうも抵抗感が、なくならない。

電気釜の残りご飯に梅干しを入れておにぎり。そして、お茶は、乾燥したドクダミを煎じて煮出し、保温ポットに移して一日中持ち歩く。車での移動が多いので、おにぎりは、運転中の空いた時間に少しずつ口に入れて空腹を癒す。

たまにコンビニに立ち寄り、飲み物コーナーに目をやると、ありとあらゆる種類の飲み物が勢ぞろいしている。スポーツドリンク、ビタミン補給ドリンク、脂肪燃焼ドリンクなど、どれも健康に役立つような、気を引くフレーズがずらりと並んでいる。目移りがして選ぶのが難しいので、選ぶことをやめることにする。「人の気を引く飲み物」ではなく「自分で作った飲み物」

を選択した結果、「ドクダミ茶」に行きついた。さすがにドクダミそのものを採取して天日干しすることはできないので、乾燥したドクダミを分けていただくことにしている。千葉・東庄にある知的障害者施設「北総育成園」の利用者さんが、暑い夏、近くの山で自生するドクダミを何百キログラムも採取して乾燥し、袋にパックされたものを分けていただいている。これを朝、煮沸して、保温容器に移し持ち歩いている。

近所ですり暮らしをしている80を過ぎた女性は、道路わきで雑草として刈られてしまう前にヨモギの葉を摘んで集め、庭先で大きなザルに広げ乾燥させ、ひと夏の冷茶にするのだという。「これを飲んでると、病気がしらすなのよ。一杯、飲んでかない?ごちそうするよ。」

沖繩で一泊させていただいた民宿のおばあも、名も知らない草をその辺から摘んできて、陽当たりのいい庭で干したり裏返したりしていた。一年中の健康茶として。

いまでは、何の価値もない邪魔な雑草として刈られ、除草剤で立ち枯れる草たち。しかし、ついこの間までは、家族の健康を維持するための必需品として、重宝がられてきた。

コンビニに行けば、麦茶、ジャスミン茶、サンピン茶、なんでもみんな揃っている。

けれど、野や山や道路わきで、ひっそりと誰の目にもとまらず、生死を繰

り返していく草たちに目をとめる人はいない。飲み物としてだけでなく、胃腸薬、下痢止めなど、さまざまな病気の治療の役に立っている知恵を、昔の方たちは、身につけていた。そんな暮らしの知恵は、工業化、情報化、商業化の濁流に一気に流されてしまった。流されてしまった後に出現したのが、コンビニである。麦茶を買っていく人は、麦の穂を見たことがない。爽健美茶も十六茶も、同じである。16種類の草たちの四季の変容に興味を示す人はいない。

スーパーマーケットのことを、ひとは「スーパー」と略称する。日本語訳は「超市場」。「いままでの市場(いちば)の概念を超える販売形式の店」という意味である。市場(いちば)は人々の生業の出会い場だった。「スーパー」とは人のくらしの生業を「超えたもの」。ぼくは、熱いドクダミ茶をすすりながら「北総の里」に暮らす人々に、思いを馳せる。



▲山に分け入ったのどくだみ採り。自然の懐に抱かれ五感をフル活用して取り組む。H27.6.18

### 村議会だより

118

5月の終わりから北総では林産班のどくだみ採りが始まる。どくだみ採りは花が咲く5月下旬〜7月頭までが勝負であり時期を逃さない。林産班だけで賄える仕事ではなく園全体で協力してもらい乗り切っている。そして多くのボランティアの皆さんのお力もお借りしている。「明るい社会づくり船橋市推進委員会」の皆様はもう30年来のお付き合い。毎年朝早くから「北総の為に」と足を運んで下さる。保護者の協力も大きい。高齢となり立ち仕事は厳しくなっても我が子のためにと山に分け入りどくだみを刈るその後姿から職員は多くのことを学んでいる。栗源ライオンズクラブの皆様も永年に亘りどくだみを供出して下さっている。2

年前からは沖繩の蒼生学園の職員にもお手伝い頂いている。蒼生学園の砂川施設長と北総の武井園長が古くからの友人であり、そのご縁で叶った職員交流である。今年も早速ご連絡頂き、6月に保護者と一緒にとくだみ採りをしてもらう予定である。どくだみ採りは沢山の方のお力添えの上に成り立っている。そしてそれを受け止めてくれる自然がある。机上で仕事するよりもはるかに得られるものが沢山ある。(菅谷)

街道をゆく 132

ハナコの死を通して学ぶ 豊かな感性教育

武井 敏朗

4月2日(土)、夜6時頃、犬のハナコが死んだ。死ぬ2週間ほど前から、横たわり腹から下に力が入らない。後ろ足がブラブラしているような状態。頭を撫でたり、首をさすったりすると嬉しそだが元氣な反応はもうできない。館内放送でこの間、何回か「ハナコ」のそんな様子を流し「もう長いことないから、皆で撫でてやってほしい」とメッセージ。園の入り口で拾われて、今年で15年目か。雑種の黒犬。何の雑種かは解らない。雌犬でそのうち子供を生んで、何匹かはもらわれたが、一匹は親の「ハナコ」と園で生きた。子供の名前は「ナナコ」。親を一回り小柄にして体全体毛がふさふさとしていて、親より人懐っこく頭も良い。皆に可愛がられたが何年前に先に死んだ。

夕方、職員の鈴木さんが息をしないのを発見。その後、白樫副園長以下10人ほどの職員、放送で死の知らせを聞いたYさんを始めとする利用者の皆さんに見送られて、3分咲きの玄關桜の下に埋められた。桜の季節に桜の下で死んで桜の木の下に埋められた。これは幸せなこと。私もそうになりたい。さて、園では「一期一会一輪の花」の精神ということで、この人たちを考える上で生き物との関わりを大切にしている。生き物とは動物と植物、二つある。エミールの著者ルソーはその著の中でこう書いている。「子供を不幸にする一番確実な方法は何かあなたに知っているであろうか。それは何でも手に入れられるようにしてやることだ」と。今日の日本は少子化で子供を猫可愛がりし、我慢することの出来ない、周りの人に対する配慮が出来ない子が増えている。そのような子に「一期一会一輪の花」の話をして通じない。まして死について教えることは至難の業である。人と物を分け合うことが出来ないからであり、喜びや悲しみを分かち合うことも出来ないからである。小さいうちから自然の大切さを教えられ、命の大切さや、他人への配慮を学ぶ機会を持った子は幸せである。大切な感性教育である。自然・生・死を教えることが出来るから。北総のこの人たちは重たい障害を抱えているが「働くこと生きること」の役割と出番のある暮らしの中で仲間を認め、大切にすることを育ててきた。何時も「ご利用者様」で何でも



▲もう立つことも出来なくなってしまうハナコの頭を優しく撫でてくれるYさん。この2日後、皆に見守られながらあの世へ旅立った。H28.3.31

やつてもらえる人で生きたら、そんな気持ちを持つことは出来ない。ハナコのことを皆可愛がってくれた。それは自分が「働くこと生きること」の中で、皆の中で役割と出番を持ち自分に自信を持ち、他人を認める余力があるからだ。他の生き物や花を愛でる力も自分の置かれている立場で微妙に影響する。与えられただけの生活からは花を愛でる心は育たない。何時も安全で快適な敷かれたレールの上で生きるのではなく、時には何が起るか解らない。自然の中に足を踏み入れさ迷う時間を作る。ここではマニュアルは通用しない。暑かったり眩しかったり、蛇に出会ったり、五感フルに刺激される。いやでも大脳は活発に活動する。自然の一環の一粒でしかない私を意識する。この時人は本物の謙虚さを獲得する。この人たちへの豊かな感性教育である。

太田川のほとり 129



4月29日(金)、第74回保護者職員懇談会が執り行われました。この保護者職員懇談会は年に2回開催しており、今年で37年継続。当日は40家族、56名の保護者の皆さんが参加してくださいました。利用者の高齢化は即ち保護者の高齢化。年々参加家族も少なくなる一方で「これだけは……」と参加してくださる高齢の保護者の姿もあり、頭の下がる思いです。プログラム上には予定していません。プログラム上には予定していません。遽参加保護者より一言頂く時間を取ることになりました。保護者一人ひとりに「○○の父です。私も歳を取りましたが、これからも出来る限り息子の為に頑張っていきたいです。」「○○の姉です。歳をとって今まで以上にお世話を掛けていると思います。すが、よろしく願います。」等、直接言葉を頂いた事で、受け取る職員の方も背筋が伸びる思いでした。「親亡き後の我が子の幸せ」を願ってできた北総育成園。今こそその真価が問われているのだと思います。既に鬼籍に入られた保護者も含め、ちちははにきちんと顔向けできるような仕事をしていかなければ……。改めてそう思う春の一日でした。(絵鳩)

「若いご寄り添ってほしい」  
 看護師の視点で考える  
 看護師 師岡小百合

私が看護師として北総育成園に入職して、早いもので今年で10年目になります。この10年を通して、看護師として学んだことや今思う事について少しお話させて頂きたいと思います。

今、一番に思うことは北総利用者の皆さんは、仕事が好きだということです。北総の仕事とは、もちろん作業のことです。

入職して作業を体験した時「大人の労働と全く変わらない。ここには社会の縮図がある」と思いました。そして、今まで何も知らなかった自分を痛感しました。

利用者の皆さんは作業に参加することで必要とされる人になることを体感しているのだと思います。みんなで協力して、物作りをしたり、汗を流して山仕事や畑仕事をしたり。それは、製品になり販売されています。自分が作ったものが世に出る喜びを、皆知っています。

いつまでも、元気に働いていたい。それは自分も含めて誰でも願うことです。しかし、老いは確実にやっつけてきます。

そんな時、利用者の皆さんには、作業があります。我々のように定年がありません。仕事も無くなりません。仕事仲間を生涯失うことはありません。

共に働く仲間が、一生の友なのです。自分の体が思うように動かせなくなつた時でも、「お〜い」と呼べば答えてくれる仲間がいます。物を落ちて拾えなくなつても、拾ってくれる仲間がいます。ここは、本当にいつも賑やかで夜になつても、いつも誰かが起きていたりします。孤独で眠れぬ夜を過ごすこともないかもしれません。

我々職員が思う以上に、皆さんはお互いを必要として認め合っています。たとえ自分で体を動かせなくなつても……自分を分からなくなつても……長いその人の歴史を仲間が認めてくれます。素晴らしい信頼関係がそこには存在しています。

私はこれからも、働くこと生きることの中、利用者の皆さんが、仲間の中で少しでも長くいられるように願っています。そして、この人たちに元気に寄り添っていきたくと思っています。



▲高齢となり介護度が増すAさん。車椅子からベットへの移乗は男子職員2人がかり。朝夕のお勤めだ。

みんなの広場

① ハナコが教えてくれたこと

4月2日夕方、ハナコが死んだ。その2日前、手芸班の皆でハナコに会いに行った。ハナコは声を出す力も立ち上がる力もなく静かに皆から声をかけられるのを受け入れていた。あの活発に跳ねて人が通ると元気に吠えていた姿は、もうなかった。一緒に来ていた手芸班のFさんは、ハナコの見える所までは来るものの「犬怖いんだもん」と近くまでは来なかった。確かに若い頃のハナコはとっても活発で噛みつかれた人もいた。「でもね、ハナコはもう年とつて元気がないんだよ。Fさんが腰痛いのと一緒にハナコも身体が痛いんだって。」と言うと「うん……」とハナコに近づいて「大丈夫？」と身体を撫でてくれた。北総の歴史と共に一緒に年をとってきたハナコとFさん。犬怖い、と言っていたFさんもハナコの最期にはきちんと向き合ってくれた。ハナコが身を以て命の尊さやFさんの思いやりを見せてくれたようでした。(安藤)

② 新年度スタート

4月より新年度が始まった。私の担任は、たんぼぼ寮に決まった。利用者さんは皆挨拶をしてくれ、中でもAさんが「藤原さんよろしく

お願いします。100均行くべよ。」と元気に声をかけてくれた。担任になりAさんと初めての買い物、念願の100円ショップに満足し「安く買いよね。」と喜んでくれた。帰りにアイスが食べたいとのことでもマクドナルドのドライブスルーへ。初めて行ったようで注文の音声が機器から流れると「何だ!?人どこに居るんだ!?すごいね!!」とおどろいていた。作業、生活皆さん本当に頑張っている。その分、楽しみを作り頑張りの糧をたくさん使ってあげたいと思う。(藤原)

③ Yさんの時間

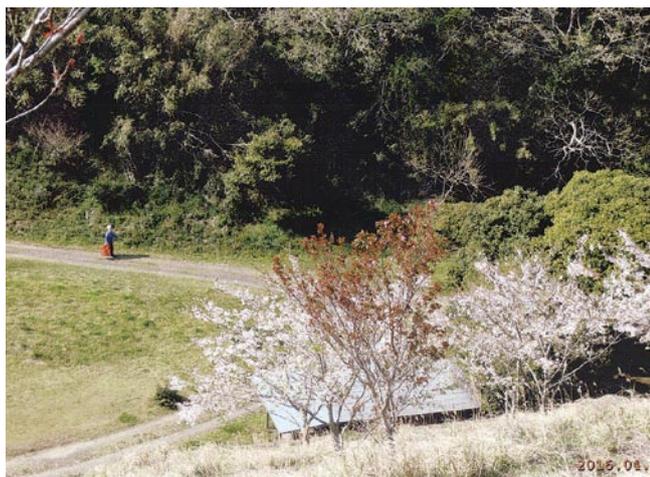
ある日の余暇の時間に、Yさんが部屋から出て来て、何やら火山の掃除用具入れの中身を全部出していた。何をするのかと見ていたら、空の掃除用具入れの中身をほうきで掃き始めた。そこで、私も流しを掃除していたが途中で止めて、Yさんと一緒に掃除をしようと思った。Yさんがモップをやり始めたので、私も後に続きぞうきん掛けをした。火山の廊下から食堂の廊下までを一緒に行なった。一通り終わり、「Yさんきれいになりましたね。ありがとうございました。」と言うと、「いいよ!」と元気に返事をしてくれて、私までとても嬉しくなり、またこれからはたくさんYさんと関わっていきたくと改めて思った。(西村)

# 桜の写真コンテスト開催

北総の里は桜の里。今年も園を取り囲むように100本以上の染井吉野やぼたん桜が咲き誇りました。桜を楽しむ時間はほんの僅か。その一期一会の美しさに利用者を重ねて、今しか見る事ができない北総の風景をぜひ記録に残して欲しい……。武井園長からのメッセージを受け、写真クラブ、広報委員会が窓口となり「平成28年度桜の写真コンテスト」を開催しました。応募総数は150枚。職員、保護者による投票の結果、上位入賞作品をご紹介します。



＊1位＊ 撮影者：飯田「Mr.北総は今年66歳」



＊3位＊ 撮影者：武井「桜山遠望」



＊2位＊ 撮影者：安藤「桜の下を“いってらっしゃい”」



＊5位＊ 撮影者：白樫「田中掃除大臣」



＊4位＊ 撮影者：榊「春の屋下がり」

4月14日から16日にかけて最大震度7の大地震が熊本県で発生。その後も余震活動が続き、49名もの尊い命が失われました。怪我をした方、住まいを失った方も大勢おり、仮設住宅に入れない方の悲痛な様子が連日ニュース番組で流れています。改めてお亡くなりになった皆様のご冥福をお祈りすると共に、一日も早い復興に向けて自分たちが出来る事は何かを考え、少しずつでも実行していかなくてはと考えます。

武井園長の「街道をゆく」でも触れていますが、飼い犬のハナコが4月2日の夜、咲き始めた桜の木の下で天国に旅立ちました。14年間生活を共にした仲間との別れは辛く寂しいものですが、死を持って知る事ができる命への感謝など、学ぶことも大きいです。「動物は最高のオンブズマン」とは武井園長の教えですが、物言わぬ動物が大切にされている環境は、職員一人ひとりの心がけによって保たれます。動物や野の花を通して、自分の辛さを訴えられない利用者の心を読む技術を磨いていけるよう、今年度も丁寧日々を重ねていきたいと思えます。

(絵鳩)

編集後記